

古代エジプトにおける ラピスラズリについて ——その現実的価値と象徴的意義—— 大城道則

序論

紀元前の三千年間という極めて長い期間にわたって繁栄した古代エジプト文明は、しばしば驚異と感嘆の言葉で語られるが、この繁栄は、ある意味では、古代エジプトの各王朝が中心となって組織的に、各種の原材料を大量に入手し、それを加工して成り立っていた物質文明に基づくものであると言える。そこで、本論ではそれらの原材料のほとんどがエジプトの領域やその近隣諸地域から入手されるにもかかわらず、唯一ラピスラズリのみが、遥か遠方よりもたらされてきたものであることに注目してみたい。何故ならば、ラピスラズリは、古代エジプト社会において他の原材料に比べて格段に重要視されており、今日、世界中の博物館に所蔵されている古代エジプトの優れたラピスラズリ製品は、あらゆる困難をものともせず、エジプトまでもたらされたものだからである。ではなぜ、古代エジプト人は、そこまでにラピスラズリにこだわったのであろうか。

このような問題に対して、今日のエジプト学は比較的冷淡であった。ラピスラズリについての研究はほとんど見当たらないが、数少ない研究としては、J. R. ハリスやA. ルカズの著書が挙げられる。我が国では、石黒孝次郎氏と榎一雄氏の論文があるがどちらも博物誌的要素が強い。本論では、以上のことを踏まえ、まず、第一章では、古代エジプトにおけるラピスラズリの重要性を確認するために全王朝時代を通して主要な考古学的資料を概観し、第二章では、帝国主義の時代として知られている第18王朝の資料の集大成である『エジプト古代の記録・第IV部』(以下Urk. IV^①)とテル・エル・アマルナで発見され、当時の外交用語のバビロニア語などで書かれた新王国時代における周辺諸国との外交文書であるアマルナ・レター(以下EA^②)とを用いることにより原材料の移動が激しかった当時の国際関係を通してラピスラズリの果たした役割を考え、第三章においては、単に美的価値を持つる奢侈品というだけではなかったと考えられているラピスラズリの古代エジプト文明における精神世界の一端に触れてみたいと思う。筆者は、これらのことを考察することにより、古代エジプト人がラピスラズリに付与していた価値あるいは社会的属性の一端を解明し、古代エジプト社会の実像の理解に多少でも寄与できればと考えているので

ある。

なお本論末には、今回用いた2つの資料(Urk. IVとEA)の中に現れる全てのラピスラズリの記載箇所を参考として付加しておく。

第一章 考古学的資料から見たラピスラズリ

エジプト学について学ぶ場合、その学問の新しさとは反対にその対象はきわめて古い時代に属するため、資料も質的にも量的にも極めて限られているのは当然である。その結果、個々の研究者の専門分野によって用いる資料が、考古学的なものと同碑文などを主体とした文献学的なものに分かれざるをえない。しかし、その両方を併用することが最良の方法であることは言うまでもない。そこで、まず、この第一章では、考古学的資料から古代エジプトにおけるラピスラズリの重要性というものを考えてみたい。

ラピスラズリの出土例は、古代オリエント世界に広く分布している。そして、特に出土例の豊富なメソポタミアとエジプトにおいては、古来その周辺地域に原産地が存在すると考えられてきた^⑤。しかし、1968年のG. ハーマンの研究論文^⑥に基づく現在の定説では、当時のラピスラズリの唯一の原産地は、質的にあるいは量的に考慮するならば、両地域から遠く離れたアフガニスタンのバダクシャン(Badakhshan)のケラノ＝ムンジャン(Kerano-Munjan)地区にある数カ所の鉱山のみであると考えられるようになっている^⑦。このように原産地が極めて遠方にあるにもかかわらず、古代エジプトにおける実際のラピスラズリの出土物はかなり多い。その最古の例は、カウ・エル・カビィール(Qaw el-Kebir)出土のナカダI期に年代づけられるビーズにまで遡る^⑧。ナカダII期から第6王朝までのラピスラズリの研究を行ったJ. C. ペインは、多くの発掘報告書を用いてこの時期のラピスラズリの出土例を表にまとめあげた。それによると、北はゲルゼ(Gerzeh)から南は第1カタラクトのちょうど南のクウォール・バハン(Khor Bahan)まで、ラピスラズリの発掘されないその時期の墳墓はほとんど無い。そして、この時期の出土物の特徴としてJ. C. ペインは、ラピスラズリの形態の大半がビーズであり、また、ラピスラズリがメソポタミアなどの外国の要素と結びついて、有力者の墳墓から見つかる^⑨と述べている。このJ. C. ペインの主張を受けてM. ライスは、ラピスラズリの所有が、この時期ちょうど発展段階にあったエリート層の役得であったのではなかったのかと提案している^⑩。このJ. C. ペインの表の中にも挙げられているが、アビュドス出土の第1王朝のジェル王のブレスレットとギザ出土の第4王朝のヘテプヘレス女王のラピスラズリなどを蝶の形に象嵌したブレスレットなどの数多くのラピスラズリを伴う宝飾品は、その精巧さと芸術性の高さで有名である。これ

以外の出土例では、第6王朝のペピ1世のラピスラズリ製の印章とラピスラズリとアメジストを象嵌した銅製の指輪とが挙げられる。また、ヒエラコンポリス出土のラピスラズリ製の小像は、その明らかにエジプト的でない特徴のためによくその起源が論議の対象とされ、『ヒエラコンポリスⅠ』の中におけるJ. カイベルの簡潔な報告によると表題の下に「ラピスラズリの女性像；胴体の上で両手を交差させている、平らな形、曲がった膝、それら全ては、ギリシア諸島の像を思い出させる」と書かれており、このことからJ. カイベルは、所謂“キクラデスのビーナス”を想定していたと考えられる。それに対して、イラン考古学の権威であるR. ギルシュマンの影響を受けたE. ポラダは、このラピスラズリの女性像が、キクラデス諸島の彫像の特徴である円柱形の首と広い大腿部とを持っていないという理由でJ. カイベルの意見を否定し、自らは、紀元前2千年紀後半のイラン美術における女性像の特徴である交差する両手の類似性からイラン影響下のペルシア湾地域との関連の可能性を提案している⁹⁰。そして、自らの研究フィールドをアラビア湾に求めているM. ライスは、東アラビアのタルート(Tarut)出土の小像の頭部との類似性からエジプトのものでも、イランのものでもなく、アラビア湾地域自身のものであると主張している⁹¹。しかし、いずれの意見もまだ推測の域を出ない。唯一の確かな事実は、既に、国家統一以前からラピスラズリがオリエント世界の東端であるバダクシャンから西端であるエジプトまで届いていたということだけである。

古王国後の第1中間期におけるラピスラズリの資料は少なく、マトマール(Matmar)出土のビーズがあるくらいである。しかし、次の中王国時代に入ると途切れていた対外交渉の再開を反映してか、ラピスラズリの出土物が増加する。特に、その精巧な技術やデザインから古代エジプトにおいて最も高い評価を受けているアメンエムハト2世、センウセレット2世、センウセレット3世、アメンエムハト3世と続く第12王朝の王たちの莫大な宝飾品の中には、多くのラピスラズリ製品が含まれている。また、中王国時代には、王以外の貴族のものにも素晴らしいラピスラズリ製品が多く見られる。しかし、何と云っても中王国時代におけるラピスラズリで最大の注目を集めるものは、おそらくアメンエムハトⅡ世の治世に隠されたとされる“トードの財宝”(Tôd Treasure)であろう。この“トードの財宝”の中には大量のラピスラズリ製品が含まれている。その中でも特に、ラピスラズリ製の円筒印章には、クレタ、シリア、カッパドキア、メソポタミアからのものが含まれており、エジプトとメソポタミアとの間の貿易関係についての論議の際、良く持ち出される⁹²。

第2中間期には、ヒクソス期のもと思われるマーチ・コレクション所蔵のラピスラズリ製のアミュレットとインヨテフという名前がラピスラズリに彫られた金の指輪以外は目立った出土例は見当たらない。しかし、新王国時代に入

ると状況は一変し、タアア2世の妻であり、第17王朝最後の王であるカーメスと第18王朝の基礎を築いたアハメスの母親であるアーホテブの宝飾品やトトメス3世のメンケト、メンウイ、メルティという3人の妻の宝飾品そして、何と言ってもツタンカーメン王墓に代表されるような豪華な宝飾品の中にラピスラズリを使用したものが大量に現れる。第3中間期に入っても第21王朝のアメネモペとプセンネス1世や第22王朝のシェシェンク1世、オソルコン2世、シェシェンク2世などの墳墓から非常に芸術性の高いラピスラズリを使用した宝飾品が出土している。王以外の宝飾品としては、高級神官ピネジェム2世のブレスレットなどがある。筆者の知る限り、それ以降のラピスラズリ製品では、第26王朝かあるいはそれ以降に年代づけられる背面がラピスラズリとトルコ石で象嵌されたバー鳥を型どったペンダント・トップが目立つくらいである。

以上のように、ラピスラズリの考古学的資料は古代エジプト全王朝時代を通じて大量に発見されており、古代エジプトにおいてラピスラズリが重要視されていたことがわかる。しかし、これらの考古遺物から得られる情報というものは、古代エジプトの王や王族が自らの富と権力の高さを示すために使ったであろうということが推測できるくらいで余りにも漠然としている。つまり、考古学的資料は、その性格上、何らかの手掛かりを抽出できるかもしれないが、それは常に断片的であり、当時の社会について直接語ることはないのである。そこで、続く第二、三章では、これらの考古学的資料からは得ることができない情報を文献学的資料を用いて明らかにし、古代エジプトにおけるラピスラズリの位置づけを行い、その意義を考えてみたい。

第二章 ラピスラズリの入手経路とその利用

古代エジプトにおいて、ラピスラズリという単語が最初に出現するのは、初期の歴史記述の一つであるパレルモ・ストーンの中においてである。この中でラピスラズリは、ケスベッジ *bsbd* と呼ばれ第4王朝のスネフル王の治世において初めて使用される。その他にも、パレルモ・ストーンの中では、クフ王が自らのために建てたラピスラズリ製の記念碑についての記述がある。他の古王国時代の記録では、サフラー王の記録が残っている。幾つかの疑問を残しつつも、このケスベッジが一般的にラピスラズリを指す言葉であると現在では考えられている^①。そして、パレルモ・ストーン以来、ラピスラズリは、様々な碑文やパピルスの中に登場するのである。

我々がラピスラズリのような奢侈品を考える場合、まず第一に思い浮かべるのは交易商品や税の対象として扱われたかどうかという問題であろう。しかし、古代エジプトでは、外国との商業活動は、新王国時代になるまで国王によって

独占されており、商人階級というものは存在していなかった。その上、今日他のオリエント地域から出土が期待されているような商業記録の公文書は、古代エジプトのどの時期においても存在していないのである¹⁸⁾。また、十分にエジプトの勢力圏内であるシリア・パレスティナの属州には、エジプト国内と同様の税を課すことができたが、ヒッタイト、アッシリア、バビロニア、ミタンニなどの近東の独立国に対しては、もちろん徴税の手段を持ってはいなかった。このような状況の中で、ラピスラズリの社会的役割を考える場合、その入手経路と入手方法からエジプト国内での最終的な使用例までの流れをとらえ、理解することが重要となろう。そのために、ここでは、比較的資料の豊富な新王国時代のラピスラズリを取り上げてみたいと思う。

新王国時代に入るとエジプトは対外進出を開始する。そして、トトメス3世の治世にその領土は最大となり、南部のヌビアを支配し、北東部のシリア・パレスティナ諸国を属州化していった。そして、各属州は、自治権の承認を得る代わりに、エジプト王の命令に服従する誓いをたて、貢納品を納め、エジプトと敵対する国々との接触を禁じられた。その上、エジプトの軍事的拠点であるガザ、シドンなどの港湾都市の整備と維持に必要な物資や現地駐屯のエジプト軍に宿舎などを提供すること、そして、税金をエジプトに納めることなどを約束させられた。また、長子を人質とし、彼らにエジプトに対する忠誠心を植えつけるべく教育を施した。他方、対等の立場であった国々とは、相互の友好関係を保つために贈り物の交換がなされた。この時代、エジプトは、その歴史上初めて帝国と呼ぶにふさわしい支配を確立したのである。新王国時代の王たちは、戦争によって戦利品を獲得し、近隣諸国からの献上品を得た。これらの中に大量のラピスラズリが含まれていたのである。

A. 戦利品

a. メギッドから

U r k. IV, 662 : 銀、金、ラピスラズリ、マラカイト、穀物、ワイン、大きな牛、子牛

b. ウラザから¹⁹⁾

U r k. IV, 686 : ウラザの領主1人、兵士329人、銀100デーベン(1deben=9.1g)、金100デーベン、ラピスラズリ、マラカイト、青銅製容器

B. 献上品

a. アッシュールから

U r k. IV, 668 : 一つの大きな本物のラピスラズリ²⁰⁾の塊20デーベン9カイト(1kite=9.1g)、2つの本物のラピスラズリの塊と粉状ラピスラズリ30デーベン、3つの

玉状の素晴らしいバビロン産のラピスラズリ^㉑、着色されたアッシュール製の容器、多くの装身具

b. バビロンから

E A 10 : ラピスラズリ 2 ミナ (1 mine = 600g)、1048個の玉^㉒を持つラピスラズリ製のネックレス1個

c. ミタンニから

E A 21 : 本物のラピスラズリ製のネックレス1個と金

d. キプロスから

U r k. IV, 708 : タイル状の〔銅〕108と1/2個、銅製の水差し2040デーベン、タイル状の鉛5個、シート状の鉛1200枚^㉓、ラピスラズリ110デーベン、象牙1本、t3gw (樫、楡)の木材2本

e. シリア・パレスティナから^㉔

U r k. IV, 669 : この国の金とラピスラズリで飾りたてられた領主の娘... ラピスラズリが嵌め込まれた金の斧

f. フェニキアから^㉕

U r k. IV, 688 : ... 銅、鉛、ラピスラズリ、緑色の石...

以上のように近隣諸国から得られた戦利品と献上品は、当時のオリエント世界におけるエジプトの存在意義の高さを示すものであり、同時に、その原材料の中で上位に位置づけられるラピスラズリの政治的重要性をも示している。では、このようにして得られたラピスラズリは、エジプト国内でどのように利用され使用されたのであろうか。

戦利品や献上品としてエジプトに入ってきたラピスラズリは、王によって、勝利をもたらしてくれたアメン神への感謝のために神殿への奉納(寄進、寄贈)品として納められたのである。

C. 奉納品

a. トトメス3世より

U r k. IV, 637 : 金とラピスラズリ製の大きなハス型のカップ1個、トルコ石製の小さなハス型のカップ3個

b. アメンホテプ3世より

U r k. IV, 1670 : 大量の大きな金と純度2/3の金、そして、数えきれない程のラピスラズリとトルコ石。

これらのことから神殿への奉納品においてもラピスラズリは、金、銀に次ぐ程の高い価値を持つものであったことがわかる。そして、ラピスラズリの古代エジプト社会における最も末端の利用法は、第一章で挙げたような小像や印章、

そしてビーズや象嵌細工という宝飾品などの他には、ルネッサンス期のフレスコ画にも同様に見られる顔料としての役割と宝石の利用にしばしば認められる医薬品としての役割とがあった。W. ヘルクは、上述の U r k. IV, 668 のラピスラズリなどは、顔料として利用された確率が高いと述べている⁹⁶。しかし、A. ルカスは、高価で永続的な青い顔料であるウルトラマリン（群青）は、粉末状にしたラピスラズリから得られたかもしれないという僅かな可能性を残しつつ、古代エジプトにおいてラピスラズリが顔料として使用された証拠はなく、使用されなかった可能性が高いと述べている⁹⁷。古代エジプトでは、高価な原材料は、国家から職人たちに支給され、彼らは、それを上流階級の人々が望むデザインへと変形させた。顔料もまた例外ではなかった。以下、オストラカに記述されたものからその例を挙げてみる。

D. 顔料の支給

G C. 69,1の表側 :素晴らしいラピスラズリ 7デーベン
絵のためのラピスラズリ 7デーベン

これらのラピスラズリの例を見てみると、多くのラピスラズリが一般的に顔料として使用されたように思えるが、ケスベッジ・ネフェル・ネフェル（非常に素晴らしいラピスラズリ⁹⁸）は、J. R. ハリスによればラピスラズリではなくブルー・フリット⁹⁹であるので、ラピスラズリが、顔料として使用されなかったというA. ルカスの主張は、この意味では、ある程度正しいと言える。しかし、単なるケスベッジも上記以外のオストラカの中においては、顔料として現れているので、A. ルカスの否定的な見解は、見直されるべきである。つまり、実際、古代エジプトにおいて、ラピスラズリは、顔料として使用されていた。ただ、主要な青色の顔料であるブルー・フリットに比べてその量が少なかったということである。これらの事実は、J. R. ハリスが述べているように、高価なラピスラズリから顔料を作りだすことが、非常に不経済であったという事¹⁰⁰と同時に、ブルー・フリットの青色の顔料としての実用性の高さを示しているのかもしれない¹⁰¹。もう一つの医薬品としての役割は、しばしばローマ時代の文献の中に現れ、中世ヨーロッパへとその伝統が引き継がれていくが、古代エジプトでは、既に、新王国時代にラピスラズリが医薬品のリストの中に現れている¹⁰²。

以上のように、入手から消費までのラピスラズリの流れを見てみると古代エジプト社会におけるラピスラズリの重要性及び密着度が読み取れる。

第三章 ラピスラズリの象徴的意義

第二章では、新王国時代の文献学的資料から古代エジプトにおけるラピスラ

ズリの入手経路とその利用について考察した。しかし、古代エジプトの本質を探ろうとするならば、その精神文化の流れを汲み取る必要があり、そのためには、主観的な解釈が必須であると J. A. ウィルソンは言う⁹⁵。しかしながら、ラピスラズリの考古学的資料は、研究者を圧倒する程であるにもかかわらず、その精神文化を直接伝える資料には乏しく、J. A. ウィルソンの理想に近づくのは容易ではない。そこで、この第三章では、可能な限りの断片的な資料を利用して、幾つかの角度から、古代エジプトにおけるラピスラズリの象徴的意義について考察し、古代エジプトの精神文化の一端に触れてみたいと思う。

古代エジプトにおいて、ラピスラズリは主に王冠、ネックレス、胸飾り、ブレスレットなどの宝飾品やアミュレット（護符）として現世で使用されただけでなく、冥界での生活のために副葬品としても使用された。なぜなら、古代エジプト人は、あらゆる物に力が宿っていると考え、特に、アミュレットには、生前だけでなく、死後もその影響力があると考えていたからである。また、一般的に宝飾品は、神殿の儀式において、神や女神に捧げられ、彼らの力の象徴ともなり、これによって彼らの力が増大するとも考えられていたのである⁹⁶。古代エジプトにおけるラピスラズリは、G. マスペロによるとイシス、ネフティス、ネイト、セクメトという女神のイメージであった⁹⁷。また、シナイ碑文では、ハトホル女神に対する形容として「ラピスラズリの貴婦人」という興味深い言い回しがなされている⁹⁸。つまり、ラピスラズリには、女神の象徴としての何らかの意義があったと考えられるのである。

M. エリアーデは、ラピスラズリが、その独特の青色から星の輝く夜空を表し、メソポタミアにおいては、月神シンを表すことから、この青い石を宇宙的象徴であると考えた⁹⁹。同様に、C. アンドリュースも、ダーク・ブルーは、全てを包み込み守る夜空の色であり、ラピスラズリの色であると述べている¹⁰⁰。このような解釈は、ラピスラズリ自身の持つその独特の色合いからの単純な推測に過ぎない。しかし、古代エジプト人は、夜空には、神々が住んでいると考えていたので、全く的外れとは言えないであろう。

H. シェーファーや H. キースは、ラピスラズリには、何らかの象徴的な意味があるのかもしれないと漠然と考えていたが、このことに対する特に注目すべき点は、ラピスラズリが髪の毛の象徴として古代エジプトの文学作品の中にしばしば現れるということであろう。新王国時代の 5 人の王（ツタンカーメン、セティ 1 世、ラムセス 2 世、ラムセス 3 世、ラムセス 6 世）の墳墓に彫られている神話的物語である『聖牛の書』の前半部を構成している『人類破壊神話』¹⁰¹は、メソポタミアや聖書の洪水神話と関係があると考えられているが、この中でラピスラズリは、太陽神ラーの髪の毛として述べられている。

人類は、彼（太陽神ラー）に対して陰謀を企てた。その時、陛下（太陽

神ラー)は、年老いてしまっており、彼の骨は、銀となり、彼の肉体は、金となり、彼の髪の毛は、本物のラピスラズリとなっていた。

また、チェスター・ビーティ・パピルスIの中に含まれている『7つの愛の讃歌^⑧』の中でも美しい女性に対する髪の毛の象徴として述べられている。

彼女は、幸福な年の始まりの明け方の星のようである。肌は白く輝き、彼女の目の様子は愛らしく、彼女の唇の言葉は甘く、彼女は多くを語らない。首は真っ直ぐであり、胸は光り輝いており、髪の毛は本物のラピスラズリであり、腕は素晴らしい黄金であり、指はハスの蕾のようである。

上記の2例から考えると、古代エジプト人は、ラピスラズリを髪の毛の象徴として捕らえていたと思われる。そして、それ以外にも、類似表現として文学作品の中に現れる場合があるのである。

古代エジプト文学を代表する作品の一つである『難破した水夫の物語^⑨』の中では、ラピスラズリは、神の化身である蛇の眉毛として述べられている。

その時、私は雷鳴を聞き、それが海の波だと思った。木々は裂け、大地は震えた。顔の覆いを取ってみると、私は、それが迫り来る大蛇だとわかった。大蛇は、30キュービットの長さがあり、その髭は、2キュービット以上であった。その体は、黄金で覆われており、眉毛は、本物のラピスラズリであった。

ウェストカー・パピルスの『クフ王と魔術師たち』の一部である『第5王朝の諸王の誕生^⑩』の中では、出産直後の幼い王に対する表現の中でラピスラズリ製の王の被り物として使われている。

イシスは、彼女(妊婦)の前に、ネフティスは、後ろに自分を置き、ヘケトが出産を促進した。イシスは言った「名前が『力強い』というあなたよ!その名前のように彼女の子宮の中で力強くあるな!」するとその子供は、彼女の腕の中に滑り込んで来た。その子供は、1キュービットで、強い骨を持ち、手足は、金で覆われており、本物のラピスラズリ製の王の被り物をしていた。

古代エジプト文学の最高峰との評価が高い『シヌへの物語^⑪』の中では、ミイラの頭部として述べられている。

夜は、あなたのために織物の女神タイト自ら杉油と包帯でもって捧げられる。葬儀の行列は、あなたのために埋葬の日になされる。そして、ミイラの棺は、黄金であり、その頭部は、ラピスラズリである。牛に引かれつつ、楽団があなたの前を行進しながら、天はあなたが棺の上にあるように、あなたの上にある。

上述の全例から、ラピスラズリには、髪の毛あるいは頭部と神々に対する何らかの関連性というものが存在したのではないのかと思われるのである。実際、

古代エジプトでは、小像の髪の毛や眉毛や髭は、よくラピスラズリでつくられており、J. R. ハリスは、このような文学作品の中でのラピスラズリの引用は、この慣習に関連するものであったのかもしれないと示唆している⁹⁷。また、ラピスラズリの模造品であると考えられている青色のファイアンスやガラスも髪の毛、髭などによく使われた。そして、E. マッケイは否定しているが、実際、墳墓内の多くの壁画に描かれたエジプト人の髪の毛あるいはそれに準ずるかつらの色には、黒の顔料の他に、ラピスラズリ・ブルーの顔料が使用されることが多かったのである。R. O. フォークナーも彼の著書の中においてラピスラズリ・ブルーを髪の毛の色として定義している⁹⁸。また、古代エジプト語で髪の毛を意味する言葉には、“šny”と“sm 3”があったが、“sm 3”の方は、単に髪の毛を意味しただけでなく、髪の毛の房、頭皮を伴う髪の毛をも意味していた⁹⁹。このことから、“sm 3”は、かつらや被り物をも同時に意味していた可能性も考えられる。

さて、ここで、最大の問題となるのは、古代エジプトにおけるラピスラズリと髪の毛、かつら、被り物との関連性についてである。しかし、このことについて考える前にまず、古代エジプト人にとっての髪の毛、かつら、被り物とは、どのような意味があったのかを考えておく必要があるであろう。

髪の毛が、幾つかの社会や文化の中で魔術的、宗教的という重要な意味を持っていることは明らかである。例えば、フランク族の王たちは、幼少の頃から髪の毛を伸ばしたままにしなければならなかった。なぜなら、もし髪の毛を切るならば、国王になる権利を放棄することとなるからである¹⁰⁰。また『アエネーイス』の中では、葬儀の際に死者の前髪を切り、冥界の神へ供える行為が述べられている¹⁰¹。『旧約聖書』の『士師記』の中では、髪の毛を切ったり、失ったりすることによる魔力の喪失について述べられている¹⁰²。

古代エジプトにおいても、髪の毛は、重要であったと考えられている。そのことは、多くの壁画の中で古代エジプト人が髪の毛を編んでいたたり、リボンを巻いたり、金銀の装飾品を付けたりしていることやツタンカーメンの祖母であるティイの髪の毛の房がツタンカーメン王墓の副葬品の中に含まれていたことからもうかがえる¹⁰³。実用品としては、以下で述べるかつらの材料やビーズをつなぐ糸の役割として、また馬具の一種である「ハエ払い」と名付けられたものとして、そして、目や顔に化粧品を塗るための道具としてボール状に丸めて使用された¹⁰⁴。時代は新しくなるが、もう一つの興味ある例として、髪の毛を使用した古代エジプト人の神への祈願の方法が、ヘロドトスの『歴史』巻2-65の中で述べられている¹⁰⁵。

町々の住民たちは、次のようにしてこれらの動物に願をかける。その動物の所属する神に祈り、自分の子供の頭髪を、場合によっては全部、

あるいは半分または三分の一剃り取り、その髪を秤にかけ銀でその重さを量る。頭髪のかかった重さだけの銀をその動物の飼育係りの女に与えると、その係りの女はその価だけの魚肉を切り、餌として動物に与える。

このように髪は、神事とも関係していたようである。髪は神聖なもの、美しいもの、魔術的なものとして古代エジプト人の意識の下に存在していたことは間違いないように思われる。

一方、古代エジプト人にとってのかつらは、バダリ期には既に使用されており、時代が進むにつれて、そのデザインは、精巧になっていき、一般的に、数多い装身具の一つと考えられていた。古代エジプトにおいて、かつらは、奴隷から王に至るまで男女の差無くあらゆる階層に用いられ、特に王や貴族のかつらは豪華で、中王国時代以降になると赤色や青色に染められることもあった。

これらのかつらの材質は、A. ルカスがカイロ博物館所蔵のかつらを調査した結果、それが古代エジプトのものである限り、一部の植物繊維で作られたものを除いて、材質のほとんどは人間の髪の毛であった。そして、他の材質、例えば、馬の毛や羊毛で作られたという証拠はないのである。

壁画の中で、かつらを表す一般的な方法は、それを黒色や青色に着色することであった。もし、古代エジプト人が黒色と青色とを正確に区別できなかったと仮定するならば、この現象を理解するのはたやすい。しかし、区別できたとしたならば、これは一体どういうことなのであるか。E. マッケイの「強い光りの中においては、ある種の黒髪は、青くぼやけて見える」という単純な見解に全面的に賛成する研究者はいないであろう。つまり、もっと他の何らかの理由が存在したということが仮定されるはずである。また、ラピスラズリを模倣して作られたとされる青色ガラスもラピスラズリ同様に小像などの髪の毛やかつらによく使用されていたことがわかっている。

次は、被り物についてである。古代エジプトにおける被り物の代表は王権の象徴である王冠であるが、古代エジプトでは、上エジプトの伝説上の王メネスによる統一以前から王冠が存在していた。つまり、上エジプトにおける白冠と呼ばれるヘジト冠そして下エジプトにおける赤冠と呼ばれるデシュレット冠とである。実在の第1王朝の創始者と考えられているナルメル王の所謂ナルメルのパレットと呼ばれているものの中では、王が白冠と赤冠を別々に被っている図が描かれている。これら2つ以外にも、幾つかの種類が知られているが、その中で、特に、注目すべきものは、青冠であろう。これは、ケペレシュと呼ばれ、その存在を示す最も古い記録は、第二中間期の第13王朝ネフェルホテプ3世のカルナックにおける供養碑の中に現れる。この碑文の内容からケペレシュは、王の軍事用の王冠であると考えられているが、その機能も起源もまだ明らかでない。このケペレシュの例は、王の彫像によく見られるが、青冠というそ

の名が示す通り青色である。材質としては、ラピスラズリ・ブルーのガラス等が使われた。しかし、実際は皮製であつたらしい。もうひとつ王冠の前頭部に聖蛇ウラエウスがつけられているツタンカーメンの黄金のマスクで有名なメネス冠というものがある。この王冠は、一般的に古くから被られていたが、これにもラピスラズリ・ブルーのガラス等がよく使用されたのである。

以上の具体例から、古代エジプトにおけるラピスラズリとは、次のものを表すと言えるであろう。つまり、「神と女神の象徴」と「髪の毛、かつら、被り物の象徴」とである。そして、この2種類の象徴を結び付ける根拠としては、先に例として述べた『人類破壊神話』の中の“彼（太陽神ラー）の髪の毛は本物のラピスラズリとなっていた”という一節と、王権の象徴であり、髪の毛を背後に連想させる王冠にラピスラズリ・ブルーの素材がよく用いられたということが挙げられるであろう。C. レンフルーは、広範囲なネットワークに沿ってもたらされ、それを所有することにより、ハイ・ステータスを得るというものをプレステージ・グッズ（威信財）と呼んでいる⁶⁰。ラピスラズリは、この定義に上記の2つの象徴という概念を付加したものであったと言ってもいいかもしれない。

このように、古代エジプト人にとってのラピスラズリとは、金、銀に次ぐ価値を持つ現実的に重要な意義を持つものであり、古代エジプト文化を語る上で欠かせない存在であったと考えられるのである。その上、古代エジプト人にとってのラピスラズリとは、頭部に関わる髪の毛、かつら、王冠の象徴としての神聖な意味を持つものであった。この2つの事実による神話的結晶が『人類破壊神話』であり、現実的結晶が青冠やメネス冠であったのかもしれない。

終 論

以上の考察から、筆者は、古代エジプト人にとってのラピスラズリとは、これまで考えられてきたような稀少性を伴う原材料としての入手コストのみに由来する単なる奢侈品や嗜好品というだけではなく、金、銀に次ぐ第3位の価値を持つ程高価な原材料であり、「神と女神の象徴」、「髪の毛、かつら、被り物の象徴」でもあったと考えている。ラピスラズリがナルメル王の第1王朝統一以前から、つまり古代エジプト文明の揺籃期において既に存在し、特別扱いを受けていたことから、この時期に出現していたエリート層あるいは支配者階級に属する人々は、ラピスラズリというものを、当時のエジプト人にとってほとんど未知の世界であったと思われるシュメールへの憧れとしてとらえていたと考えられ、古代エジプト文明の創世記から全王朝時代を通して、ラピスラズリへの欲求が失われることなく継承されていったという事実から、ラピスラズリ

の存在は、古代エジプト文化の特色の一つであると言っても過言ではないであろうと考えている。また筆者は、たとえ交易方法が直接貿易ではなく、中継貿易であったとしても、ラピスラズリが原産地アフガニスタンからエジプトまで到達していたという事実は、シルク・ロードを凌ぐ人類史上最古の長距離貿易の証拠を示唆しているとも考えている。

本論は、筆者が古代エジプトにおいて最も重要であったと考えられている原材料の一つであるラピスラズリを総合的に捕らえることを目的とした研究の一環であり、その予備考察である。そのため、ラピスラズリの原産地からエジプトまでの完全な流通経路と流通機構やラピスラズリの時代的、地理的分布、そして、その形態分類といった側面の考察は行っていない。しかし、これまで、大量の出土例がありながら、多くの研究者たちが部分的にしか触れておらず、ほとんど焦点を当てられていなかった古代エジプトにおけるラピスラズリを研究対象として取り上げたことは、古代エジプト文化を理解する上で少なからず意義のあることであると筆者は考えている。

注

- ① J.R.Harris, *Lexicographical Studies in Ancient Egyptian Minerals* (Berlin,1961);A.Lucas, *Ancient Egyptian Minerals and Industries*, (4th ed.;London,1962).
- ② 石黒考次郎「ラピスラズリ考-附ラピス・ラズリ作品新資料紹介」『オリエント』20 (1988)、榎一雄「バダクジャンのラピスラズリ」『月刊シルクロード』8-9,11,12(1977)。
- ③ K.Sethe and W.Helck, *Urkunden der 18. Urkunden des ägyptischen Altertums*,vol.IV,pts 1 -22(Leipzig,1906-1958)。
- ④ 著者は、幾つかあるアマルナ・レターに関する翻訳書の中からW.L.Moran, *The Amarna Letters* (London,1992)を参考。
- ⑤ A.Lucas, *op.cit.*,p.399.
- ⑥ G.Herrmann,“Lapis Lazuli:The Early Phases of its Trade,”*IRAQ* 30 (1968),pp.21-57.
- ⑦ チルマク Chilmak,シャガ=グラ=イ=ロバット=イ=バスカラン Shaga-Darra-i-Robat-i-Paskaran,ストロンビー Stromby,サーリ=サン Sar-i-Sang と呼ばれている鉱山がそれであるが、最近パキスタンのケッタ近郊においてもラピスラズリ鉱山が発見され、波紋を投げかけている。
- ⑧ C.Andrews, *Catalogue of Egyptian Antiquities in The British Museum* (London,1981),p.26.
- ⑨ J.C.Payne,“Lapis Lazuli in Early Egypt,”*IRAQ* 30(1968),pp.59-61. 同論文中において、ペインは、第1王朝の殆どと第2、3王朝の全ての時期におけるラピス

ラズリの出上例の欠如を指摘している。

- ⑩ M.Rice, *Egypt's Making: The Origins of Ancient Egypt, 5000-2000BC.* (London, 1990), p.89.
- ⑪ J.E.Quibell, *Hierakonpolis*. part. I (London, 1900), p.7.
- ⑫ E.Porada, "A Lapis Lazuli Figurine from Hierakonpolis in Egypt," *Iranica Antiqua* 15(1980), pp.179-180.
- ⑬ M.Rice, *op.cit.*, p.90.
- ⑭ W.A.Ward, "Relations between Egypt and Mesopotamia from Prehistoric Times to The End of The Middle Kingdom," *JESHO* 7(1964), p.129; W.F.Leemans, "The Trade Relations of Babylonia and The Question of Relations with Egypt in The Old Babylonian Period," *JESHO* 3(1960), p.36.
- ⑮ J.R.Harris, *op.cit.*, pp.124-129.
- ⑯ 紀元前第2千年紀まで、「商人」という言葉はなく、輸入品も市場を通じて配分されなかった。新王国時代になっても自然経済が中心であったが、この頃になると神殿の役人の中にも余剰収穫物や供物を売買するものが現れた。しかし、この時代においても、商人とは殆どシリア人であった。
- ⑰ シリア・パレスティナの首長たちはファラオに「労働生産物」"b3kw"と毎新年、彼らの「善行・徳行」"inw"とを与えなければならなかった。
- ⑱ C.Aldred, "The Foreign Gifts Offered to Pharaoh," *JEA* 56(1970), p.110.
- ⑲ W.Helck, *Die Beziehungen Agyptens zu Vorderasien in 3.und 2 Jahrtausend V.Chr.* *Agypptologische Abhandlung* 5(Wiesbaden, 1971), p.387. この中で、ヘルクは、トトメスⅢ世のウラザへの侵攻は、ラピスラズリを獲得するために行われたのかもしれないと提案している。
- ⑳ 一連の資料中、「本物の」という修飾語が付けられているもの以外は、ガラス等のイミテーションである可能性が高いと考えられている。
- ㉑ ヘルクは、ラピスラズリのイミテーションであろうと提案している。
- ㉒ W.Helck, *Materialien zu Wirtschaftsgeschichte des Neuen Reiches* VI (Wiesbaden, 1969), p.46. この中で、ヘルクは、印章付き指輪と解釈している。
- ㉓ R.O.Faulkner, *A Concise Dictionary of Middle Egyptian* (London, 1988), p.128 の中では、金属のシートと解釈され、J.H.Breasted, *Ancient Records of Egypt*. vol.2, (Chicago, 1906), p.206 の中では、pig=塊と解釈されている。
- ㉔ シリア・パレスティナは、当時、*Rtlnw*と呼ばれており、主に内陸部を意味していた。
- ㉕ フェニキアは、当時、*Dshy*と呼ばれており、主に海岸部を意味していた。
- ㉖ W.Helck(1969), *op.cit.*, p.49.

- ⑳ A.Lucas, *op.cit.*, pp.343-344.
- ㉑ A.Gardiner-J.Cerny, *Hieratic Ostraca*(Oxford,1957).
- ㉒ *nfr*は、「美しい」、「素晴らしい」という意味を持つため、ケスベッチ・ネフェル・ネフェルは、おそらく最上級品を意味していると思われる。
- ㉓ J.R.Harris, *op.cit.*, pp.128-129; A.Lucas, *op.cit.*, pp.340-341. フリットは、ガラス原料が比較的低温で処理されたガラスの一步手前の状態の物質。
- ㉔ *Ibid.*, p.129.
- ㉕ A.Lucas, *op.cit.*, p.343.
- ㉖ 春山行夫『宝石-2』平凡社、(1989)、168-170頁。
- ㉗ C.P.Bryan, *Ancient Egyptian Medicine: The Papyrus Ebers*(London, 1930), p.21.
- ㉘ 加藤一朗「エジプト学者ウィルソン」『史泉』30(1965)、113頁。
- ㉙ A.R.David, *The Ancient Egyptians*(London,1982), p.101.
- ㉚ G.Maspero, *Manual of Egyptian Archaeology*(London,1920), p. 248.
- ㉛ A.Gardiner and T.E.Pet, *The Inscriptions of Sinai. Part.2* (London, 1955), pp.41,107.
- ㉜ M.Eliade, *Traité d'histoire des religions*(Paris,1949), pp.234,370.
- ㉝ C.Andrews, *Ancient Egyptian Jewelry*(New York,1991), p.37.
- ㉞ J.R.Harris, *op.cit.*, p.127.
- ㉟ M.Lichtheim, *Ancient Egyptian Literature. vol. 2* (Berkeley,1976), pp.197-199; A.Erman, *The Ancient Egyptians: A Sourcebook of their Writings* (London,1978), pp.47-49; W.J.Darby, P.Ghalioungui, L.Grivetti, *Food: The Gift of Osiris, vol.1* (London,1977), pp. 124-125.
- ㊱ M.Lichtheim(1976), *op.cit.* pp.182-186. 原題は、『The Cycle of Seven Stanzas』である。
- ㊲ *Ibid.*, pp.211-215; A.Erman(1978), *op.cit.*, pp.29-35.
- ㊳ M.Lichtheim, *Ancient Egyptian Literature. vol. 1* (Berkeley,1973), pp.220-222; A.Erman(1978), *op.cit.*, pp.44-45.
- ㊴ M.Lichtheim(1973), *op.cit.*, pp.222-235; A.Erman(1978), *op.cit.*, pp.14-29.
- ㊵ J.R.Harris, *op.cit.*, p.127.
- ㊶ G.Brunton, "Some Notes on The Burial of Shashanq Heqa-Kheper-Re," *ASAE* 39(1939), pp.543-545.
- ㊷ E.Mackay, "On The Various Methods of Representing Hair in The Wall-paintings of The Theban Tombs," *JEA* 5(1918), p.113.
- ㊸ R.O.Faulkner, *op.cit.*, p.197.
- ㊹ A.Gardiner, *Egyptian Grammar*, (3rd ed. Oxford,1957), pp.590,595.

- ⑤② J.G.Frazer, *The Golden Bough:Taboo and The Perils of The Soul* (London, 1951),pp.258-259.
- ⑤③ T.H.Delabere May, *The Aeneid of Virgil*(London),IV.695-700.
- ⑤④ J.R.Kohlenberger, *The NIV Interlinear Hebrew-English Old Testament*, vol.IV (1987), Judges,13:5,16:13.
- ⑤⑤ N.Reeves, *The Complete Tutankhamun*(London,1990),pp.126, 168-169.
- ⑤⑥ A.Lucas, *op.cit.*,p.31.
- ⑤⑦ A.D.Godley, *Herodotus* I (London,1960), II .65 ; F. Petrie, *Religious Life in Ancient Egypt*(London,1924),p.195.
- ⑤⑧ V.G.Childe, *The Most Ancient East* (London,1929),pp.74, 172-173.
- ⑤⑨ 『世界考古学大系』第13巻、(1960)、平凡社、54頁；春山行夫『髪：おしゅれの文化史』、(1989)、平凡社、66頁。
- ⑥⑩ A.Lucas, "Ancient Egyptian Wigs," *ASAE* 30(1930),p.196; E.A.Eisa, "A Study on The Ancient Egyptian Wigs," *ASAE* 48(1948),p.18.
- ⑥⑪ E.Mackay, *op.cit.*,pp.113-116.
- ⑥⑫ A.Lucas, "Glass Figures," *ASAE* 39(1939),pp.229-232.
- ⑥⑬ W.V.Davies, "The Origin of The Blue Crown," *JEA* 68(1982),p.69.
- ⑥⑭ J.Samson, "Amarna Crowns and Wigs," *ASAE* 59(1973),p.50.
- ⑥⑮ W.V.Davies(1982), *op.cit.*,pp.75-76.
- ⑥⑯ C.Renfrew, *Approaches to Social Archaeology*(Cambridge,1984),pp.161-162.

URKUNDEN DES AGYPTISCHEN ALTERTUMS Vol.IV.

- | | | | |
|------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| • Urk.IV,22.(2) | • Urk.IV,669. (2) | • Urk.IV,951. | • Urk.IV,1591. |
| • Urk.IV,70. | • Urk.IV,671. | • Urk.IV,952. | • Urk.IV,1654.(2) |
| • Urk.IV,98. | • Urk.IV,686. | • Urk.IV,999. | • Urk.IV,1668. |
| • Urk.IV,174. | • Urk.IV,688. | • Urk.IV,1007. | • Urk.IV,1670. |
| • Urk.IV,337. | • Urk.IV,701. (5) | • Urk.IV,1046. | • Urk.IV,1697. |
| • Urk.IV,436. | • Urk.IV,706. | • Urk.IV,1069.(2) | • Urk.IV,1728. |
| • Urk.IV,455. | • Urk.IV,708 | • Urk.IV,1098. | • Urk.IV,1729. |
| • Urk.IV,457. | • Urk.IV,717. | • Urk.IV,1213. | • Urk.IV,1730. |
| • Urk.IV,459. | • Urk.IV,722. | • Urk.IV,1240. | • Urk.IV,1731. |
| • Urk.IV,475. | • Urk.IV,732. | • Urk.IV,1260. | • Urk.IV,1859. |
| • Urk.IV,476. | • Urk.IV,744.(2) | • Urk.IV,1332. | • Urk.IV,1937. |
| • Urk.IV,546. | • Urk.IV,852.(2) | • Urk.IV,1406. | • Urk.IV,1956. |
| • Urk.IV,637. | • Urk.IV,875.(3) | • Urk.IV,1442. | • Urk.IV,2028.(2) |
| • Urk.IV,638.(3) | • Urk.IV,907. | • Urk.IV,1475. | • Urk.IV,2029. |
| • Urk.IV,662. | • Urk.IV,929. | • Urk.IV,1494. | • Urk.IV,2070. |
| • Urk.IV,667. | • Urk.IV,930. | • Urk.IV,1552. | |
| • Urk.IV,668.(2) | • Urk.IV,932. | • Urk.IV,1571. | |

THE AMARNA LETTERS

EA2:6-9(Reverse).

EA7:49-62.

EA8:43-47.

EA9:19-38.

EA10:43-49.

EA11:24-34(2).

EA12:5,7,9,11,12,14,16,17,19/26(Reverse).

EA14:9(II).

EA15:7-15.

EA16:9-12.

EA19:80-85(3).

EA21:33-41.

EA22:9-11,48-54(4),55-57(I)/1-2,3-4,6-8,9-10,20-22(2),23-26,29-32,43-47(3),62-64
(II)/7-9(III).

EA25:16,17,18-19,20-21,22,23,24,25,26,31,33-34(2),35-36(2),37,38,39,40,41(2),42
(2),43,44,45(2),46,47,48,49,51,52-53(2),54,55-56(2),57-58,62,63-64(2),52-53
(2),54,55-56(2),57-58,62,63-64(2),69,71-72(Ⅰ)／3-4,5-6,9-10,11-12,13-14(2),
15-17,20,21-23,26-27,29-31(2),32-33,45-46,47-48,49-50,60-61,63(Ⅱ)／43,46,47,
52-54,55-58(2),59-62(2),64-67,70-72(Ⅲ)／21-22(Ⅳ).

EA26:30-48.

EA27:19-27.

EA29:50-54,182-185.

EA41:23-28.

EA101:1-10.

[注]()内のローマ数字は、モランによる章分けであり、アラビア数字は、ラピスラズリの現れる回数。

(関西大学大学院博士課程後期課程)